

## 幻の国百済、扶余<sup>ぶよ</sup>を訪なう

仏教文化百花繚乱の百済の聖明王の時代に、仏教は日本に伝来しました。660年唐・新羅連合軍によって百済が滅亡する(白村江の戦)約100年前のことです。大陸の高い文明を後進国であった倭の国に伝える代わりに雑兵を求めてきた、いわば give and take の deal だったのでしょう。

百済の最後の都、扶余を訪れたいという積年の夢が昨年10月に遂にかないました。

ソウルから高速バスに乗って私と世志子さんは扶余を目指しました。篠突く雨をバスの中から恨めしく眺めながら、あくる日の好天を祈りながら。

翌日、私たちの願いが天に通じたのでしょうか、空は見事に晴れました。爽やかなのは秋空だけではありませんでした。私たちをホテルのロビーで待っていてくださったのは、爽やかな笑顔が素敵なガイドのクムさんでした。早速扶余の散策が始まりました。

扶余の都城サビ防衛の中核だった扶蘇山城の目下には、白馬江が、時の流れを忘れさせるかのように、ゆっくりと流れています。その昔、中大兄皇子がひょっとしたら見たかもしれない、当時から恐らくはそれほど変化していないであろう山の稜線を仰ぎながら古代のロマンにとっぷり浸ったのです。

歴史資料がほとんど残っていないのは滅亡した国の運命なのでしょう。また勝者により綴られた歴史書にどれほどの真実が残されているのでしょうか。焼き払われてしまった都に点在する遺跡を見るには、想像力を逞しくしなくてはなりません。遠い昔多くの人々が往来した大寺院の華やかな栄光の日々を臉に思い浮かべながら、頬に百済の風を感じました。

扶余博物館では1993年に発掘された金剛大香炉に目を奪われました。ため息が出るほどのその美しさに鳥肌が立つのを感じました。大香炉を見た時、なぜこれほどの技術力を有した百済が滅亡という憂き目に遭ってしまったのか、と歴史の皮肉に思いを馳せたのでした。

旅の楽しみは地元の料理。クムさんお勧めの知る人ぞ知る、食堂では自家製のドンドン酒がついつい進んで、陽気になってしまう私たちでした。団体ツアーでは味わえない FIT(Foreign Independent Tour)の醍醐味です。狭い通り沿いに面していて、小さくてわかりにくい看板の掛かったあの家庭的な食堂。もう一度訪れたい。

私は山岸涼子の傑作「日出処の天子」を読んだ時から古代史にはまってしまいました。史書自体も少なく、信憑性に疑義のある時代のものであるために、古代史を題材にした作品には作家(漫画家)の自由奔放な描写がかなり許容されています。山岸の厩戸王子もトンデモの主人公です。女人と見紛うばかりの白晳の美少年、キレッキレの頭脳を持つ冷徹な天才、禁断の恋に身悶えする青年。私の愛する厩戸が生きていた飛鳥時代が半島の百済の時代なのです。百済の勉強、ハングルの勉強と称してこの時代の多くの歴史ドラマも見ました。それらの知識や記憶が点と点で繋がり、ついに立体的に現れた**五感で感じる旅**だったのです。